

石原 明著

漢 方

中国医学の精華

中公新書

26



中公新書 26

石原 明著

漢 方

中国医学の精華

中央公論社刊

装幀 白井晟一

まえがき

近年、わが国ばかりでなく、欧米でも漢方が見なおされて、ブームとさえなっている。それにもかかわらず、漢方ほど誤解され、本質が知られていないものは少ないであろう。

漢方という言葉は不思議なニュアンスをもっていて、人によって受け取りかたが違う。

ある人ははじめから馬鹿にして相手にさえしない。かと思うと別の人は、なにか神秘めいた作用を連想する。また別の人は、漢方ほどよいものはない、万病ごとく治ると信じている。

このろみに百科事典を引いても、漢方に対して納得のいく解説が記してあるものはひとつもない。

わが国では、明治初年にドイツ医学に範をとる方針が政府によって決定されて以来、それまで長いあいだ主流となっていた伝統医学の漢方は、アカデミズムの外に追い出され、一時は絶滅に瀕したとさえあった。

それなのに、近年に至ってブーム的現象をおこして再検討の気運にむかってきたのはなぜだろうか。

原因はいくつもあるが、なによりも指摘しなければならぬことは、現代医学のゆきづまりと

新薬への不信、およびマスコミの影響による薬の乱用と薬禍に対する救世主と過信されている面はないであろうか。

現代医学とまったく異なる次元に立って生命や疾病を考え、数千年におよぶ経験の集積が昇華した医学が漢方であるから、現代医学の手の届かないところで奇蹟的な効果をみせる場合が少なくない。しかし、これをもって漢方を万能と速断することは大きな誤りで、漢方治療にも幾多の短所があり、限界がある。

本書は、漢方の本質を正しくやさしく理解していただくために、中国医学史の究明を主眼とし、漢代に完成した薬物療法の方法論が後世の中国でどのように変貌して今日の「中医学」（現代中国の伝統医学）になったか、また、なぜ漢代の治療方針が、本国においてよりもわが江戸時代にさらに磨きあげられて現代の漢方として継承されてきたのか、という点にメスをいれた。

中国医学史は、本国においても若い学問で、最近多方面の研究が活潑に行なわれているが、通史として刊行されているものは三種しかなく、それもなかなかわが国で現在手に入れることは困難であり、邦文のものは戦前に二種あっただけで、もちろん絶版本である。欧文では三種あるが、これも一般的ではない。

また、漢方治療の実際に関する解説書も戦後約六十種ほど刊行されているが、なかにすぐれたものがあっても、難解にすぎ一般教養書としての性格をそなえたものはまれである。

このような理由で、本書はこの両面の要望を満たそうと努力した。

私は漢方を専業とするものではない。しかし医学史の研究に携わっている以上、漢方を離れることは不可能である。

医学は実地の学問である。その歴史を研究する上に、ある時代に実際に行なわれていた医療がどれほどの価値があったかは、臨床面を通してのみ評価されなければならぬと考えている。

それで求められるままに、漢方治療をしてきた経験を古典にただしてまとめたのが本書の後半の部分である。処方五十種に限定したのは、紙数に制限があるのと、私自身の経験で実際に効果を確認したものから選んだので、もちろん私の癖があらわれていることを意識している。

また本書では漢方の薬物療法にしか触れなかった。ハリ、キユウにまで解説を加えるべきであるが、記述が煩雑になるので省略した。

本書が漢方の理解のために少しでも役に立てば幸いであり、また東洋文化史の一部として拾う点があるならば光栄の至りである。

著者

目次

まえがき

第一章 漢方―この未知なるもの

「漢方」は日本製

漢方でも使う民間薬

「証」―漢方独特の概念

女性にだけ効く薬

2

第二章 中国医術のめばえ

魔法から薬へ

醫という文字

鍼灸の発明―黄河文化圏1

陰陽五行説の迷路へ―黄河文化圏2

不老長寿への憧れ―揚子江文化圏

18

経験医術の結晶―江南文化圏
養生思想の発生

第三章 医学としての発展

儒家の眼で見た漢代の医学

獄につながれた二人の名医

政治犯を生体解剖する

謎の名医張仲景

脈診・針灸の古典

神仙から本草へ

隋唐時代の医学全書

竜宮の秘方と愛妻家の医書

房中書と解剖図の出現

人体模型「銅人」

勅命による医書の整備

救療施設と国定処方

徽宗の書いた医学書

第四章 近代医学のそとで

攻撃療法の案出—金代

温補療法の隆盛—元代

医学史上の乾隆帝

世界に誇る『本草綱目』

民間に療術おこる

伝統医学への挑戦

中国医学の特殊な性格

第五章 伝統医学の現代化

伝統医学抹殺論争

マルクス主義と「中医学」

医学遺産の発掘工作

生薬資源は確保できるか

「中医学」の新しい歩み

第六章 日本における漢方

明治以前の医療

民間薬と化した漢方薬

現代漢方のパイオニア

常識を超えた現代性

第七章 漢方治療の方法

虚実・動静・寒熱など―病気はたえず変化する

「太陽」から「厥陰」（けつちん）まで―疾病の時期

気・血・水―体質的素因

「七情」の内因と「六淫」の外因

望・聞・問・切―要求される鋭いカン

孫子に通ずる治療のかけひき

妙薬は口にうまし

冷暖房によって変わる「証」

「明るみ」に出る生薬の秘密

生薬の演ずる奇現象

第八章 漢方処方を選び方

〈異常体質〉肥満体質 虚弱体質 アトニー体質 アレル
 ギー体質 のぼせ症 冷え症
 〈全身症状〉発熱 むくみ 疲労 貧血 高血圧症 低血
 圧症
 〈神経症状〉不眠症 多眠 精神不安 夜驚症
 〈皮膚異常〉肌荒れ・色黒 発疹 かゆみ 黄疸 汗かき
 〈排泄障害〉便秘 下痢・血便 排尿異常 寝小便
 〈婦人生理障害〉月経異常 更年期障害 流産癖 乳汁欠
 乏
 〈外科的なもの・その他〉出血 打撲傷 熱傷 凍傷 化
 膿症 頭痛 めまい 視力障害 耳の炎症 耳鳴りと難
 聴 呼吸困難 鼻出血 赤鼻 鼻の炎症 口渴・口乾
 味覚異常 食欲不振 嘔吐 のどの異物感 咳と痰 嚥
 下困難 動悸 胸痛 むねやけ 腹痛 腹水 肩こり
 背の感覚異常 腰痛 手足のほてり 痙攣 麻痺 関節
 痛

付録 著効ある漢方処方五十種

地図 前漢時代の中国

漢方

— 中国医学の精華

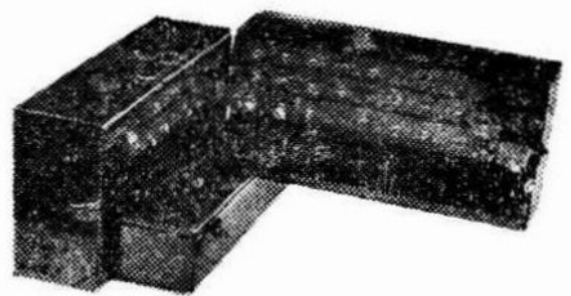
第一章 漢方——この未知なるもの

「漢方」は日本製

ひとむかしまえは、「漢方」といえば煎じ薬の代名詞のように思われ、頑迷な時代おくれの老人か知識の低い人々が、その心理的効果だけで有難がってのんでいたもののように誤解されていた。しかし最近では、かえって若年層のインテリの中に、熱心な漢方ファンが増加している。

漢方ブームは、ひとりわが国だけではなく、東洋諸国はもとより、欧米でも広く注目をあびており、フランスなどでは、柔道、生花、禅などとならんで、ハリ、キュウ、漢方が東洋ムードの寵児とさえなっている。

しかし、漢方の本質に関しては、現在まだ未開拓の領域が多く、従来の科学常識ではまったく理解に苦しむ、いわゆる「漢方の常識」というものが少なからず存在する。また、それ以前の問



江戸時代の医家が携行した「薬籠」

題として、「漢方」についての定義さえ一般化していないのが現状のようである。

「漢方」という名称はわが国独自のものであって、明治以後に用いられた言葉である。

明治維新前のわが国の医学の主流は、中国系の医学であった。江戸中期にオランダ医学がわが国にもおこって、幕末には西洋医学がかなりの速度で普及した。主流派の医家たちは西洋医学にたずさわる医家を「蘭方医」とよび、西洋医学に「蘭方」という名称を与えてこれが一般化した。

ところが明治政府は、新興国家として近代文明をとりいれるため、熟慮のすえ、将来の日本の医学の指針を定めて、西洋医学とくにドイツ医学に範をとることとし、医事制度もその線にそって制定したのである。そのため、いままで医学の主流であった中国系医学は、逆転して西洋医学にその地位をゆすり、「漢方」という新しい呼び名があたえられた。そして、使用する薬剤は漢方薬、医家は漢方医、調剤原料の薬品は漢薬、という一連の新語が生まれたのであった。

漢方で使用する薬物は、ほとんど自然物であったから、古くから「キグスリ」といわれ、「生薬」の字をあてられていた。明治になってから日本にも近代薬学が行なわれるようになり、西洋でも自然物を薬用とするものが少なくなかったので、この方面の学問は「生薬学」として独立した。

それ以来、学界では、草根木皮のたぐいは、漢方のものも西洋医学のものも総称して、「生薬しょうやく」という名が用いられ、「キグスリ」という呼称は民間の俗称となった。また、「和漢薬」という名も新しく民間で用いられた。

「漢方」か「漢法」か、いったいどちらが正しいかという議論もある。しかし、「方」は処方、方法などという「方」であり、「法」はテクニックを意味するのだから、「漢方」と書くのが正しいという説が圧倒的で、明治初年の用語例でも、漢方と書くのがふつうであった。

明治末期から昭和初期にかけて、「皇漢医学」という名称が、漢方に代わってかなり用いられたことがある。これは国粹派の人々の間から生まれた言葉のようであるが、その語源については二説ある。ひとつは皇国固有のカンナガラの医学と中国から伝来した漢の医学とを合わせて、皇漢医学と称するのだという解釈と、皇は「皇国」の皇ではなく、「大いなる」という意味であつて、輝かしい漢代に大成した医学であるから皇漢医学と称するのだと唱えた人もある。しかし、皇漢医学では、皇国の皇の字と誤認されやすいということから、この名称は戦後はほとんど用いられていない。

現在では、学問的には、現代医学の主流をなす西洋医学に対して、「東洋医学」という名称が一般化しつつある。しかしこれをただちに民間で用いられている漢方という言葉と同格に考えることはできない。

現在、俗に漢方といわれているものは、その根本の方法論と思想とは中国医学に発しているものの、日本に伝えられてからの長いあいだに、日本の事情や国民性に合うように、しだいに変貌してきている。だから漢方の内容を学問的に正しく表現するなら、「日本の伝統医学」と呼び、

英訳の場合には *Kampo medicine*——*Japan's traditional medicine* というふうにサブタイトルをつけるのがもっとも妥当であろう。

漢方の名称の論議はさておいて、中国の医学を解明するために、わが国の伝統医学である漢方を引き合いに出してきたのはなぜかと、読者は疑問をもたれるにちがいない。

一言にしていえば、わが国に伝えられた中国系医学は、千年以上にわたって日本化されたとはいうものの、その本質にはすこしも改変が加えられず、中国医学の方法論の真の姿が、そのまま現在にまで継承されているということである。だから、今日われわれが実際に行なっている漢方の方法論と医療技術を通してこそ、はじめて中国医学の本質が解明されるのである。

それはあたかも、古代中国や遠く西域で形成された音楽や舞踊の伎楽、散楽などが、日本固有の神楽歌や催馬楽などと併存しながらも雅楽として伝承され、雅楽の演出の実際を通してはじめて真の姿を知ることができると同じことである。このことは仏教の禅についてもあてはまる。

中国に発生した医学でありながら、本国では、その伝統は滅んで変形し、日本的な要素が加わりながらも、本質はわが国に厳然として残っているのである。だから、ある種のフィルターを通して中国医学の真の方法論だけを抽出することは、雅楽や禅の場合と同じく、他山の石としてむしろ好都合なのである。

日本的要素を取り除き中国医学の本質を明らかにするためのフィルターとして、まず最初に、漢方と民間薬との区別をはっきりさせなければならぬ。世間では、煎じ薬というものは、なんでも漢方薬だと思いきこんでいる人があまりにも多いからである。

ハトムギの煎汁を常用しているうちにイボがとれ、肌が美しくなったと喜んで、友人に会うごとに片っぱしからすすめている若い女性がいる。また、ハブソウの実をお茶代りにのんだら、頑固な慢性便秘が忘れたように治ったというので、これまた会う人ごとに偉効をたたえている初老の重役氏がいる。

万病はクコで治り、不老長寿もウソではないと、絶対の自信をもって誰彼の別なくクコ党にしてしまふ老婦人もある。

そしてこれらの人たちは、漢方薬はよく効くものだと思いきこんでおり、よそ目には熱狂的な漢方ファンだと思われるのである。

ところが、「強引にすすめられたので飲んでみたら、効果どころか、どうも身体の調子がよくない。第一、とてもまずくて飲めた代物ではない。やはり漢方薬などという煎じる手間のかかる古くさい非科学的なものよりは、化学成分のはっきり表示してある、アンブル入りの内服液の方が安心だ」という人もある。